

原田 筑水

身心共に爽やかな仲秋の午後、旧知のさる国立大学元教授の家を訪ねた。世間話の末であったが、

ゆくりなくも「人生の姿」について拝聴した。この日の話を要約すると、「人が世に出て成功する条件。」としては「才能

筑紫路に秋は来にけり
筑水
「筑豊の炭砒跡」たたずまひ
橋あれば橋を渡りて芦の花
やま路来てむらさきうすき野菊哉
蔓引けば烏瓜まだ枝にあり
かたつむり並びし一つ動き出す
野火昏れて寂莫星を掲げたら

「晩秋の島宿にて」
枯萩に懸けてもの干す島の宿
島宿のほか客なき夜寒かな
海峡といふ迅さにて冬の潮
手焙りを配りおかるる句の座敷
燃えあがる焚火のけむり月揺るる
「そのころの想い出浮び秋深し」
白ぎくに余情偲ばゆ在りし日の
散りし君のこれる功の薫りかな

は五分、あとの五分は運と良い親分を持つこと。」とのことであつた。

これは長年の人生経験や人間観察的に世の中を見渡した結論のようである。境遇や生活から得た智慧と云うものであろう。前述の親分と云う言葉を「良い友人、良い弟子、門下子分に置き変えてもよい。要するに良き交遊と解して下さい」とのことであつた。

才能について。「良知良能の天才人」は別

として「努力集中による自己陶冶によって才能は伸ばせるようだ。」「生れ乍らの天才などはないので、心の閃きや努力に努力を積重ねて伸ばした者が天才だ。」と云う人もある。仮令天才でなくても、努力の成果たる「才能」によって若干でも世のために役立つことが出来る果報者は、それこそ人生最大の成功者ではあるまいかとの仰せ。

運について。「運は即ち運」であつて、これは人間の手におえるものでない。人の住む世界に運を否定することは到底出来ぬ相談である。「才能、運、良き交遊」の凡てが備はるならこれこそ大幸運と云うもので、人生に恵まれ昇華できる人がある反面「才能も良い交遊も持ち乍ら、どうしたことか不運な人もある。又「才能は充分人に勝れて居り乍ら」好運にも交遊にも恵まれない人がある。或は才能、運、交遊の孰れにも恵まれない人が非常に多い。寧ろこれが社会の現実に近いのではあるまいかと。

昔流儀に申せば「功成り名を遂げる」と云う志のない人はあるま

いし、「そのような志を一度も持ったことがない人」も恐らく皆無であろう。このために「才能、運、良い交遊」が必要なことも確かである。

然し交遊には利害を超越した真の友情ばかりではなくて寧ろ「利害の切れ目が縁の切れ目」と云うような単なる社交的なものがあるし、他人が有名になると「自分の友人だと名乗って出るが、失敗となると初めから赤の他人であつたよおな顔をする有名人が現実に居る。」

人を踏台にするためにだけに友情を売物にする人が尠くない。これが当世風だと言ふ嘆声も聞かれるではないかとのこと。

前陳の説話によって聊か所感を新にしたが私も年のせいであろうか、われなりに諦観して老碩学の邸宅を辞去した。丹精の庭の白萩が夕陽に輝いているのが印象的であつた。

申歳の歴史

- 明治5年(壬申) 官制改革、学則公布、徴兵令公布、陸軍海軍二省設置、東京横浜間鉄道開通、国立銀行創立
- 17年(甲申) 兌換券銀行券条制制定、華族制度制定(公・侯・伯・子・男五等設定) 農村恐慌、国内貧農村の動揺、加彼山事件、自由党解散、特令全権大使韓国派遣
- 大正9年(庚申) 尼港(ニコライエフスク)事件起り沿海州警備に出兵、第1回国勢調査(総人口5千5百万人)
- 昭和7年(壬申) 上海事件、英米両国より正式抗議、国際連盟リットン調査団来る、五・一五事件犬養首相射殺さる、斎藤内閣成立、特別高等警察新設、日満議定書調印日満経済ブロック形成、大東京市実施
- 19年(甲申) 大都市疎開命令、新聞の夕刊廃止、国民登録実施、高級娯楽停止、興業場停止、昭和山噴火開始、東條内閣退陣、神風特別機動隊編成
- 31年(丙申) 日本登山隊マナスル登山頂征伏憲法調査会法成立
- 43年(戊申) 台湾青年の柳文郷、台湾に強制送還、ロバートケネディーを撃つ、朝鮮大学校設置認可、小笠原諸島返還。

私の会った人

人間の最高のたしなみはゴルフと茶道といつておられたのは、日商の高畑誠一(故人)でした。二十年近く英国ロンドンに滞在されただけであつて典型的な英国紳士で、日本でもゴルフの草分け的な方でした。

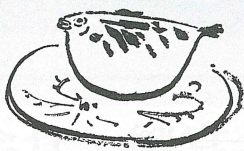
食い道楽でもあつて、東京で旨い料理がある、聞くと、「吉兆さん、いしよに行つて」とお誘いがか

かります。あつちへ一緒して勉強にもなりました。西洋料理をよく知つておられたため、日本料理の注文もいへば喜んでかたがたに

「味噌汁は精進にかき。ナンクサものにするな」とよくいわれ

「鯉と昆布の濃いダシの薄かげんがよ」。とくに魚など焼きものの「包丁」に焦げはつきもの。包丁配にはつきものさうでした。

湯木 貞一



は箸を使って食べるから、口にはいる大きにしなければ、というわけ

高畑 誠一さん

「ピンク色のはフクでない」と講釈しながら、それを肴にお酒を飲み、そのあと白子の雑炊。アツはすべて捨てられました。優雅な宴でした。

茶会には、よくお連れして、茶道

具の見定め方なども指南しましたが、すぐに自分のものにされ、自宅に茶室をつくられたのはもちろんのこと、利休、宗旦などの一流の道具を惜しげもなく購(あがな)われま

昭和の初期、倒産した鈴木商店の番頭で、日商の創始者。三十歳のとき、生糸の世界相場を狂わせた勝負師。奥様は鈴木商店社長、鈴木岩次郎氏のお嬢様、名門の人だけにすいぶん粋な方でした。英国紳士といっただけでなく古典的な日本人でもありましたが、そんな方はもう少ないように思います。

「吉兆」店主(絵)